山本周五郎全集

第九巻

講談社

山本周五郎全集

第9巻　正雪記

昭和39年5月20日　第1刷発行

定　価　480円

著　者　山本周五郎

発行者　野間省一

印刷所　豊国印刷株式会社

製本所　藤沢製本株式会社

発行所　株式会社　講談社

東京都文京区音羽町3ノ19

電話　東京(942)1111(大代表)

振替　東京3930

© Shugoro Yamamoto 1964

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

山本周五郎全集　第九巻　目次

正雪記　五
解説　中田耕治　三八九

デザイン　伊藤憲治

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

正雪記

第一部

一の一

駿河のくにの府中（今の静岡市）から、東へ一里ほど寄った田舎道を、一台の馬車がのろのろと揺れながら進んでいた。

夜の十時ごろであった。

車には箱が付いていて、その中に小太郎が横になり、干した棗の実をしゃぶりながら、高い空の星を眺めていた。小太郎は七つであった。父は与兵衛という染物職人で、東海道由比の町に店を持っていた。その日は府中まで染料を買いにいったのであるが、いつもの癖で父親が酒を飲みはじめ、夜になってからようやく帰途についたものであった。

車の中にはほかに二人の父子がいた。

それはまったく見知らぬ人であった。父親は三十二三になる浪人者で、子供は小太郎と同じ年ぐらいだろう――かれらは与兵衛が酒を飲んでいるうちに、その車の中にもぐり込んでいた。浪人は矢橋忠左衛門といい、その日焼津の宿で紀伊家の侍を斬り、そこまで逃げて来たということであった。

その父子は小太郎のすぐ脇に寝ていた。二人の上には染料用の草根や木皮を入れた袋が幾つものせかけてあったが、少年の足は小太郎の足とくっついて、さっきからぶるぶると震えどおしであった。

――怖いのかな、寒いのかな。

小太郎はしゃぶり終えた棗の核を吐きだして、またべつのを口へ入れた。

――腹がへってるのかもしれないな。

彼は干し棗を掴んで、そっと少年の手を捜した。少年は受取らなかった。

「喰べなよ、棗の実だよ」

小太郎が囁いた。少年は手をひっこめ、軀を縮めながら向うへずらせた。小太郎はふんと鼻を鳴らし、足をぐっと伸ばして仰向きになった。

車は片方へ傾ぎ、また反対側へ傾ぎ、がたがたと揺れた。そこは表海道をそれた田舎道であった。与兵衛はがっちりした背中をこちらへ向けて、ときどき馬に小言を言ったり、手綱を鳴らしたりした。かなりひどく酔っているので、半分は眠っているのかもしれなかった。

およそ二時間ちかく経ってから、与兵衛がしゃがれた声で言った。

「海道へ出るから気をつけなせえよ」

浪人は黙っていたが、袋の下で子供をひき寄せ、かさこそと身動きをした。
「いけねえ、だいぶ提灯が見えるぞ」と与兵衛が言った、「こりゃあどうも、両方から挟まれてるようだ」
与兵衛は車を停めた。小太郎は起きあがってみた。車は海道のすぐそばにあった。松並木のようすで、そこが興津川の近くだということがわかった。そして、その川の橋のあたりは、提灯の丸い灯が七つ八つ見えるし、うしろ（いまかれらの来たほう）からも、まるでこの車を追ってくるかのように、提灯の明りの近づいて来るのが見えた。
「お武家さま、どうなさるかね」と与兵衛が言った、「どうやら追手に挟まれたようだが、いまのうちにその辺の藪へでも身を隠しなさるかね」
「このままやって下さい」
浪人がそう言った。
「みつかったら、それまでの運と諦めましょう、貴方は刀で威されて乗せたと言って下さい、ただどうか、この伜だけは、助けられたら助けて下さるようお願い致します」
「お父さま、小太郎もいっしょに」
「ならん」と低い声で浪人が叱った、「おまえは死んではならん、おまえは矢橋の家名をたてる人間だ、父は短慮のために一生を誤まった、おまえは父の失敗をくり返すな、いいか」
浪人の声が喉にからんだ。
「いいか、立派な武士になるんだぞ、訪ねてゆく先は覚えているな、よし、ではどんなことが起っても動いてはならんぞ」
車は動きだしていた。
——この子もおれと同じ名前なんだな。
小太郎は胸がどきどきしはじめた。自分には関係のないことだと思っていたが、少年の名が自分のと同じであることと、父親の言葉の哀しげに切迫した調子とが、彼の幼ない心を強くゆり動かし、ひきつけるようであった。
——この子は泣きだすだろうか。
小太郎はわれ知らず軀を固くした。
——このお侍はみつかるのだろうか。
与兵衛は手綱を持って、軀をゆらゆらさせながら、半ば眠っているような声で、わけのわからない鼻唄をうたっていた。
——橋の袂まで来ると、道の片側に集まっていた人たちが、提灯をさしつけながら寄って来た。
「おい停まれ、その車停まれ」
提灯の光で、鞘をはらった槍の穂尖の、きらきらとするどく光るのが見えた。四五人は車の反対側へまわって来た。

一の二

「おまえはどこの者だ」

相手の一人が言った。府中城の見廻りらしい。かれらは小具足をつけ、十人ほどいるなかの、半数はみな槍の鞘をはらって持っていた。

「私は由比の染屋で与兵衛という者でございます、そこにいるのは伜の小太郎で、府中の御城下まで染料を買いにいった帰りでございますが」

「府中から帰るのにいまごろまでなにをしていた、もう夜半を過ぎているぞ」

「どうも酒が好きでございましてな」と与兵衛は口の端をだらしなく撫でた、「伜にせっつかれるのをつい飲みすごしまして、途中もどうやら半分は眠っていたんでしょうが——どうか御勘弁を願います」

「車の中をあらためるぞ」

「へえどうか、——その袋の中はみんな染め物用の草や木の皮でございます」

「小僧、おまえがこの男の伜か」

小太郎は口から棗の核を吐きだした。

「ああ、小太郎っていうんだよ」

侍は槍の石突のほうで彼を押した。

「もっとそっちへ寄れ」

小太郎はほんの少し脇のほうへ寄った。

侍は槍の石突で袋を突いたりはねたりした。侍は荒い息をした。片方からさし出している提灯の光の中で、その侍の息が凍って、白く、湯気のように見えた。小太郎は息が詰りそうになった。激しく握り緊めた拳の中で、干し棗がくしゃくしゃに潰れた。

「なにを御探索でございますか」

与兵衛が言った。そのとき、槍の石突にかちんとなにかの当る音がした。

「刀の鞘だ」とその侍が叫んだ、「いるぞ、油断するな」

提灯がさっと高くあげられ、侍たちがうしろへさがった。小太郎は思わず叫び声をあげた。殆んど同時に、矢橋忠左衛門は袋をはねあげ、刀を抜きながら、つぶてのように車の外へとびだしていった。抜いた刀をふりあげ、絶叫しながらとびだしてゆく彼の姿を、小太郎は恐怖のなかではっきりと見た。

侍は道を西のほうへ走った。

するとそっちにも（さっきかれらのうしろから来た）ひと組が、提灯を振りながら道を塞いでいた。

「じっとしてろ、頭を出すな」

与兵衛が喚いた。小太郎は頭を下げることができなかった。

矢橋はたちまち取囲まれてしまった。

高くかかげられた提灯の輪の中に、追い詰められた野獣のような彼の姿が見えた。小太郎は夢中で車の箱の縁につかまり、非常な怖ろしさのために、全身を音のするほど震わせていたが、どうしてもそこから眼をそらすことができなかった。

「神妙にしろ、刀を捨てろ」
侍たちの声が聞えた。
矢橋がなにかを叫び返し、さっと人影がいり乱れた。槍の穂尖や白刃が、ぎらっ、ぎらっと閃光を放ち、誰か斬られたのだろう、ぞっとするような悲鳴が起った。その悲鳴で小太郎は箱の中へ俯伏した。すると恐怖がもっと大きく、四方から彼の小さな軀を押えつけた。
小太郎のすぐそばに、もう一人の小太郎が身を縮めていた。少年は毬のように小さくなり、ひどく震えながら、口の中で、なにか呟やいていた。それは祈りのような声であった。お母さまという言葉も聞えた。小太郎はなんともいいようのない感情におそわれて、少年の隠れている袋の上に抱きついた。
「ねえ、泣いちゃだめだよ」
相手を力づけるつもりであったが、そう言うと同時に、小太郎は自分で泣きだした。
「うるさいぞ、泣くやつがあるか」
父親がどなりつけた。
「怖いよう」と小太郎が泣きながら叫んだ。
「早くいこうよ、お父っさん」
「黙ってろ、いくじなし、うるさいぞ」
小太郎は両手で耳を押えた。あのぞっとするような悲鳴を二度と聞くのはいやだった。あの声が一生忘れられなくなるだろうと思うと、それだけで嘔きけがきそうだった。
ずいぶん長い時間のように感じられたが、その騒ぎの片はすぐついたのであった。父親の話す声がするので、耳を押えていた手を放すと、与兵衛が侍に答えていた。
「へえ、畷道の土橋のところでした」
「誰か伴れなかったか」と侍が言った。
「子供を伴れていたと申す者があるが」
「いいえ、車へ乗るときは一人でございました、お断りしようと思ったのですが、刀を突きつけられるのでどうしようもございません、もうどうなることかと生きたそらはございませんでした」
「由比の染屋で与兵衛と申したな」
「へえさようでございます、しかし、――いったいあの浪人はなにをなすったのでございますか」
「もういいから行け」と侍は言った、「あとで居宅を調べに行くかもしれぬ、そのつもりでおれ」
小太郎は箱の中に俯伏したままでいた。車はすぐに動きだした。

一の三

由比の家へ着いたのは午前二時過ぎであった。与兵衛は車を裏へまわすと、小太郎に、「その子を家の中へ伴れてゆけ」と命じた。それから馬や車を片づけたり、荷物を納屋へしまったりした。
小太郎は脇の戸口から、店の土間へと入っていった。家

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

ぜんたいに、染料の酸っぱいような匂いが、強くしみついていた。その匂いを嗅ぐとはじめて、小太郎はほっと気持がおちついた。少年はすっかり怯えて、まだ震えながら、軀をぴったりと小太郎に寄せていた。

母親が手燭を持って出て来た。

小太郎が母親にあらましの話をしていると、与兵衛が入って来て戸口を閉めた。

「おつね、二人になにか食わしてやれ」彼はぶあいそうに命じた、「小太郎、わかりもしないことを饒舌るんじゃないぞ、――おつね酒をつけろ」

彼はそれらの言葉を、なにか千切って投げつけでもするような調子で言った。

おつねは黙黙と言われるとおりにした。

彼女は牛のように従順であった。店はかなり繁昌していたが、与兵衛は雇人を置かず、染料を煮たり、壺へ仕込んだり、染めあげた物を干したりするぜんぶの仕事を、その妻と二人だけでやった。おつねをどなりつけ、しばしば手をあげて追い使った。夫婦というよりは、まったく暴主と奴隷のようである。そしてまた与兵衛は暇さえあると酒を飲み、賭博に耽ったが、飲み友達という者もなかったし、賭博のためひどく負けるということもなかった。

彼は小太郎のほかには、なにものをも愛さなかった。彼は（まだそんなに小さい）小太郎に向ってよく言うのであった。

――生きていて楽しむことを知らないやつはけだものだ。

――楽しみのために身を亡ぼすやつは畜生だ。

小太郎は父親が好きであった。母親のことはみじめだと思った。父親は誰よりも賢こいし、自分もそのように生きたいものだと思っていた。

おつねは炉の火をかきおこし、芋粥の鍋をかけ、酒の燗鍋を温めた。矢橋少年はなにも喰べず、思いだしたように、しゃくりあげて泣いた。まるっこい顔で、眉がうすく、眉毛の尻のところに大きな黒子があった。唇は厚くて大きかった。

与兵衛が酒を飲みだすと、おつねは土間へおりて、釜場のほうへ出ていった。染料の煮だしにかかるのであろう。まもなくそっちからぱちぱちと薪のはぜる音が聞えて来た。

「喰べたら寝てしまえ」と与兵衛が言った。

「おまえの寝床でいっしょに寝てやれ小太、よけいなこと言って泣かすんじゃないぞ」

小太郎は矢橋少年を伴れて立った。

次の部屋には藁床の上に夜具が二つ延べてあった。それは与兵衛と小太郎のもので、おつねはいつも納屋のほうで、独りでねるのであった。――小太郎は布子だけぬぎ、下の袷一枚になって夜具の中へ入った。矢橋少年は袴だけぬいで寝た。少年は（少年用の）刀を二本枕許へ置き、い

ちど横になってから、その刀をもっと近くへひき寄せた。
釜場のほうから煙がまい込んで来た。小太郎はすぐに眠くなった。興津川の出来事の強烈な印象も、七歳の彼のねむけを妨たげるちからはなかった。
「明日んなったら栗鼠を捕りに行こうな」
小太郎は欠伸をしながら囁いた。まもなく眠ってしまったが、いつまでも矢橋少年の泣きじゃくる声が聞えるようであった。
明くる朝、母親にゆり起されたとき、外はまだうす暗かった。彼は二年まえから蒲原の普門院という寺へ、読み書きの稽古にかよっていたので、六時には家を出なければならなかった。
「そっと起きなさい」と母親が言った、「その子は寝かしておくから、——雑炊ができているから喰べて、すぐでかけないとおくれるよ」
小太郎はひどく眠かった。睡眠不足と、夜半過ぎに喰べたので、まったく食欲がなかった。ぐずぐずと支度をし、稽古包を持って家を出たが、矢橋少年はまだ眠っていた。
「小太、誰にもなんにも饒舌るじゃねえぞ」
染め場の戸口から与兵衛がどなった。与兵衛は青く染っている手の甲で、ぐいと顎のところを撫で、唾を吐いた。海のほうの雲が赤く輝やきはじめ、風といっしょに舞って来る粉雪が、美しくきらきら光った。それは風花といって風が富士山から持って来るのだといわれていた。その風花のなかを、小太郎は駈けだしていった。

一の四

矢橋少年は七日だけ小太郎の家にいた。
少年の父はあのとき殺されたということがわかった。死体は三日のあいだ、興津川の橋畔に晒されてあったという、——与兵衛は或夜、そこへいって、死体から髪の毛を切ってきて、それを紙に包んで矢橋少年に与えた。
「運が悪かったんだ」と与兵衛は言った、「相手が紀州家の侍では恨んでもはじまらない、お父っさんは病死したと思うんだな、そしておまえさんはすっかり忘れてしまうんだ」
少年は遺髪の包をふところへ深くしまった。それは、死んでも放すまいというような、念入りなしまいかたであった。そうしながら彼は涙をこぼした。
小太郎は矢橋少年と友達になろうとして、できるだけの智恵を絞った。しかし自分は半日以上も稽古にゆかなければならなかったし、矢橋少年は外へ出られなかった（府中の見廻りにみつかる心配があった）ので、七日という短かい期間では、どうにもならなかったのである。
矢橋少年は口が重かった。
「なんという殿さまの家来だったの」
こう訊いてもなかなか返事をしない。なにかしらもじもじしたあげく、「おくには出羽の山形だよ」

などと、もう何度も聞いたことを言う。当時は大阪の戦いが終って十年そこそこだし、大阪方であったか関東方であったかということは、まだなまなましく世人の興味を唆(そそ)った。おとなたちの日常の会話にも、そういう話がよく出るので、矢橋父子が誰の家来だったかということは、小太郎にとって知りたい問題だった。しかし、矢橋少年はしまいに言った。

「元の殿さまの名は言えないんだよ」

「どうしてさ、なぜ言えないのさ」

「侍はむやみにそんなことを言ってはいけないんだ」

矢橋少年はそう言って口をつぐんだ。

たったいちど、矢橋少年の笑ったことがあった。それは、山形の海で「ほっき」という貝がとれる。どんな喰べ物にも比べられないほど美味い貝であるが生きてるうちに喰べないと味がおちてしまう、それで遠くへ持ってゆくときには、竹籠へ入れたのをときどき蹴っとばすのである。ときどき蹴っとばしながらゆくと、遠くまで生きたまま持ってゆける、というのであった。

「へえー驚いた」小太郎は眼をみはった、「そうすると眼をさますのかね」

「——眼をさますって」

矢橋少年は妙な顔をした。それからふいに笑って言った、「——そうだ、眼をさますんだね、蹴っとばすたびに眼をさますんだ、それで遠くまでいっても眼をさましてるんだ、きっとそうだよ」

自分の話しにこちらの言ったことで笑ったのである、小太郎もしかたなしに笑った。

二人の交渉はそのあたりまでであった。七日めの午後、小太郎が普門院の稽古から帰ってみると、矢橋少年はもう家にはいなかった。

「江戸へゆく人がみつかったので、いっしょに伴れていってもらったんだ」

父は怒ってでもいるように言った。それが事実のようでもあり、ほかにわけがあるようにも思われた。母はなにも言わなかった。

これは寛永元年十月下旬のことであった。

参覲交代の制はまだなかったが、江戸幕府は家光を三代将軍に迎えて、徳川氏の天下はゆるぎないものになりつつあった。古くから京・大阪に根をおろしていた政治・経済、その他の社会的機構は、その中心が江戸へ移ったので、しぜん東へ移動しなければならない。また西国の諸大名もしばしば江戸へ出府するため、その主要な交通路に当る東海道には、これらの往来する人馬貨車の絶えまがなく、したがって、どの宿駅もめざましく繁昌していた。

由比は、府中から約四里で、本宿ではなく間の宿であったが、そのために却って一部の旅客で賑わった。それは商人とか渡り職人とか傀儡(くぐつ)師、旅僧、浪人などという人々であったが、——もともと旅宿が少なかったので、客の混雑

するときには、民家へも泊ることが多く、そういう点ではまだ古い習慣が残っていたし、規則とか取締り制度などもできていなかった。

与兵衛はそういう客を嫌ったが、それでも土地の世話役に頼まれるので、どうしても断わりきれない場合があった。小太郎は泊り客のあるのを喜こんだ。かれらのなかには話し好きな者がいて、自分の経験や見聞したことを話してくれる。興亡、栄枯、悲劇喜劇、冒険や戦慄。まだ幼ない小太郎の頭は、そういう話しから多くの強い影響を受けた。

——世の中は不合理なものである。

彼は漠然とそう信ずるようになった。

——人間は賢こくなければならない。

矢橋忠左衛門のように、短慮のために、一生を誤まるなどというのは、愚の骨頂である。まだ固まらない彼の頭のなかに、こういう考えが深く根を張ったのであった。

一の五

小太郎は十二歳の年に、角をあげて（前髪を立てること）久米と名を変えた。

与兵衛は、自分の仕事を彼にはさせなかった。ずっと普門院にかよって学問を続けさせ、やがては出家させるつもりのようであった。あるとき与兵衛は言った。

「本当なら侍にさせたいんだが、どうやら天下はもう定ったらしい、侍はもうだめだ、これから大きく出世するには僧のほかにない」

そのときは酔っていたし、そんなことはそのときいちど言っただけであるが、久米には父親の心がわかった。与兵衛にとって、それが最大の希望であり、反対はゆるされない、ということを理解した。

久米は黙っていた。彼はすでに彼自身の望みがあった。

——徳川の天下が定って、江戸幕府が天下を治めるとすれば、武士にならなければ栄達はできない。

彼はそう思っていた。そしてまたこうも思ったのであった。

——戦乱が終ったとすれば、力の武士ではだめだ、頭の武士にならなければならない。

彼はもうそれほど現実的であった。

久米が十二の年の十月、華麗な行列が西へ向って、由比の宿を通りすぎた。それは春日局がときのみかど（明正天皇、女帝）に拝謁をゆるされて、江戸から京都へゆくのだそうで、その贅をつくしたきらびやかな供だては、宿を通過するのに半刻以上もかかった。

同じ夜、久米の家に客があった。

局の一行が府中に泊ったので、他の旅客がはみだしたのである。客は三十二三になる痩せた小男で、名は又兵衛、職は細工師だということであった。色が黒く、とぼけたような顔をしていて、殆んどものを言わず、すぐに炉端へ坐

って酒を飲みはじめた。

よほど酒が好きらしい。出した食事も喰べずに、黙って独りで酒を飲んでいたが、やがて久米のほうを見て手招きした。

「面白い物を見せてやろう」

久米は男のそばへいった。又兵衛という男は振分の中をさぐって、小さな桐の箱を取り出し、その中から細工物の蟹を取って、久米の手に渡した。それは青銅で作ったらしい、胴は横が二寸ばかりで、銀の摺剝があり、立っている二つの眼と、足の爪は金の象嵌がしてあった。

「活きているようだな」

久米が言った。男はそれを取り戻した。そして背中をどうかすると、そこが蓋のように外れた。

「これは盃なんだよ、坊や」

そう言われてよく見ると、なるほど胴の中が盃になっていた。男はそれを下に置いた。そして炉の灰の上で熱くなっている燗鍋を取り、その酒を蟹の盃の中に注いだ。

久米は眼をみはった。

熱い酒を注がれるとまもなく、その蟹の足が動きはじめ、まるで活きているように、左のほうへゆっくりと歩きだしたのである。——与兵衛も向うで眺めていたが蟹が歩きだすのを見ると、思わず声をあげた。

男はすぐに（まだ歩いているのに）それを取りあげ、中の酒を飲んできれいに拭いたと思うと、手早く箱へ入れてしまった。なにか恥かしい悪戯でもみつかって、自分にてれているような態度だった。

「おまえさんの細工かね」

まだ驚きからさめない声で、与兵衛がそう問いかけた。

「これは天下に二つしかねえ」と男は低い声で言った、「一つは京の灰屋紹益に売った、灰屋のは動かねえ、動くのはこれだけだ、こいつは高価えから買いきれなかったんだ」

男はぐっと酒を飲んで、それから嘲笑するように言った、「京の灰屋だ、なんぞといばっても、だらしのねえもんさ」

「どのくらいするもんかね」

与兵衛が訊いた。男が答えた。

「金二百枚」

そして嘲けるように笑った。久米はそのようすを眺めていたが、好奇心が抑えられなくなって、それはどうして作るのかと訊いた。自分もそういう細工をおぼえて天下の名工といわれるようになってみたい、と言った。

「こういう仕事は誰にでもおぼえられるものじゃない」と男は言った、「それからまた、天下の名工などといわれたって、一生貧乏で、みじめな生活しかできやしない、——さっきから見ているんだが、坊やはいい眼をしている、坊やの眼はじつにいい眼だ、坊やはきっとえらく出世する、こんな、小父さんのような、つまらない細工人になろうな

どと思っちゃいけない、こんな仕事はきちがいのするこった」

こう言って、男はじっと久米の顔を見まもった。久米は大胆に見返しながら言った。

「小父さんは江戸へゆくんだね」

「ばかな大名をみつけにな」と男はまた嘲笑した。久米は眼の隅で、そっと向うの父親を見た。

二の一

粉雪まじりの強い風が吹いていた。

去年から建築にかかっている、江戸上野の清水堂(きよみずどう)の工事場で、五十人ばかりの日雇い人夫たちが、番小屋の前に幾つかの焚火を囲んで立っていた。

かれらは日雇賃の支払いを待っているのであった。秋の中ごろまでは、毎日二百人以上だったのが、工事が殆んど終りに近いので、いまでは五十人そこそこの数になっていた。

すでに昏れかかる時刻で、東叡山(とうえいざん)の森はすっかり暗くなり、不忍の池は鉛色に鈍く寒むざむと光りながら、しきりに小波を立てていた。そこは、丘のふところになっているためだろう、風は片方から吹きつけ、また逆の方角から吹きかかった。すると焚火の赤い焔や、焔の色に染った煙のむきが変るので、人夫たちはそのたびに身をずらせたり、顔をそむけたりするのであった。

久米はそのひと群の中で、焚火に背を向けて本を読んでいた。

「——道を以って人主を佐くる者は、兵を以て天下に強かるべからず、その事還ることを好む、師の処るところは荊棘生じ、大軍の後には必ず凶年あり……」

彼は口の中で低く音読した。

久米は十五歳になっていた。背丈はまだ低いけれど、筋肉のひき緊った敏捷そうな軀つきで、高い鼻や、細く切れあがった眼や、一文字なりにくいしばったような唇つきなどに早熟な賢こさと、鋭どい感受性があらわれていた。

「それは老子だな」

右側にいた男がそういった。さっきから本を覗いていたらしい、三十二三になる痩せた貧相な男で、色の黒い尖った顔は髭だらけであった。彼は焚火のほうへ手を伸したり、また腕組みをしたりしながら、絶えまなしにその軀を震わせていた。

「本当にそんなものが読めるのか」

男がまた言った。久米は答えなかった。

「おまえ侍の子だな」

久米は黙って本を閉じた。それはもう表紙のとれた、ぼろぼろの古い写本であった。久米はそれをふところへ入れた。

「こんな日雇いの力稼ぎをしながら、書物を肌につけて学ぶというのはできないことだ、まだ年もゆかぬのに、なか

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com